

# オノマトペの 副詞的用法に関する考察

## —大規模書き言葉均衡コーパスを用いて

黄慧

### ◆要旨

**本**稿は、オノマトペの副詞的用法について考察を行い、その使用状況および諸特徴について述べることを目的とする。まず、共起する助詞「と／に」について分析した結果、「と」が一般的で「に」が有標であるということが確認できた。次に、使用頻度が上位にあっても、特定の動詞しか修飾しないオノマトペもあり、使用頻度が必ずしも修飾する動詞の多様性および品詞性を決められないことが明らかになった。最後に、オノマトペが修飾する動詞について、時間的概念を用いて考察を行った。持続性・反復性の意味を持つオノマトペは、文末形式にあまり制約を持たない一方、一回性・瞬間性の意味を持つオノマトペは進行や状態を表すものと共起するものは少ない。つまり、オノマトペの音象徴的意味とそれが修飾する動詞との間には、ある程度の相関関係があることが分かった。

### ◆キーワード

オノマトペ、副詞的用法、使用頻度、助詞との共起、副詞的用法と時間的概念

### ◆ABSTRACT

This study aims to analyze the adverbial usages of onomatopoeias and describe the condition where the adverbial onomatopoeias occur and their features.

First, based on the analysis of the particles “to / ni” which co-occurred with onomatopoeias, it could be confirmed that “to” generally co-occurred with onomatopoeias, while “ni” was marked. Second, onomatopoeias modified only particular verbs even if some onomatopoeias were used frequently; that is, it was clarified that the frequency of the use of onomatopoeia could not always decide the variety and the parts-of-speech of modified verbs.

In addition, I studied the verbs which onomatopoeias modified by using a temporal concept. Onomatopoeias which had meanings of durability and repeatability did not have a strict limit for an end-of-sentential form. On the other hand, those which had meanings of “one-time” and “instantaneous” rarely co-occurred with progressive or stative expressions. That is to say, it was revealed that there was some relationship between onomatopoeias’ sound-symbolic meanings and the verbs which onomatopoeia modified.

### ◆KEY WORDS

Onomatopoeia, Use of the adverb, Usages of Onomatopoeia as Adverbial, Particles “to / ni” which co-occurred, The use of the adverb and time concept

A Study about the Adverbial  
Usages of Onomatopoeias  
Using the Balanced Corpus of  
Contemporary Written Japanese (BCCWJ)  
HUANG HUI

# 1 はじめに

オノマトペは副詞的用法で用いるものが最も多いと言われている。本稿ではオノマトペの副詞的用法について考察を行い、副詞として用いるオノマトペの使用状況およびその特徴について述べることを目的とする。

ここで言うオノマトペは、擬音語・擬態語の総称であり、本稿では主に浅野編(1978)における5分類に従っていることを断っておきたい。すなわち、本稿で用いる用語は、「擬音語・擬声語・擬態語・擬容語・擬情語」である。

## 2 先行研究

2.1で、副詞的用法の分類についての先行研究を概観し、2.2で、修飾する動詞との間の関係について述べた先行研究を概観し、2.3で、先行研究のまとめおよび問題点について述べる。

### 2.1 副詞的用法の分類

オノマトペの副詞的用法について、田守・ローレンス(1999)は、オノマトペの副詞的用法を動詞との意味関係に応じて、「様態副詞」、「結果副詞」、「程度副詞」、「頻度副詞」に4つに分けている。本稿では田守・ローレンス(1999)の分類を主に参考にする。いずれにしてもオノマトペは副詞的用法として用いられるものが最も多く、その中でも「動き様態の副詞」つまり「様態副詞」として用いられるものが最も多いということが様々な研究によって報告されている。

西尾(1983)では、助詞「ト」を伴っているオノマトペが広範囲であり、助詞「ニ」を伴うオノマトペは部分的であると述べている。同様のことが、宮内他(2011)でも記述されており、〈格助詞〉〈ダ〉〈デ〉〈ノ〉〈ニ〉が付加されるものは、その頻度の傾向が異なっており、ト付加型副詞(本稿で言う助詞「と」を伴うもの)が最も多いことからオノマトペの多様性の広がりを中心にはト付加型副詞があると結論付けている。さらに、ニ付加型副詞(本稿で言う助詞「に」を伴うもの)については、比較的少なく、限定的な語群であり、品詞性の分布上

はオノマトペとして特異な性質を持つと考えている。

### 2.2 修飾する動詞との関係

寛(2001)では、日本語におけるオノマトペと動詞との関係を「相互依存(にこり ほほえむ)」「一方依存(にっこり わらう)」「相互無依存(ゆっくり あるく)」の3種類に分類している。副詞的用法のオノマトペと後続する動詞との間にはこのような関係があり、それを保って用いられているとしている。

オノマトペと動詞との関係を使用頻度の角度から論じたものもある。陳(2007)は、副詞として用いられるオノマトペは、高頻度のものになればなるほど、修飾する動詞の範囲が広く、低頻度になればなるほど、修飾する動詞との固定的な結びつきが強くなってくると結論付けている。これについては4.2で詳しく見ていくことにする。

さらに、オノマトペの意味的特徴によっても共起パターンには違いがあるとの記述もあり、Hamano(1998:12)では、オノマトペは一般的に動作を伴う動詞を形容することが多いとし、Kita(1997:392-394)では、この用法は「動き様態の副詞」として用いられる擬態語に多としている。泉(1976)およびHamano(1998)におけるオノマトペの音韻・形態的特徴と音象徴性の関連およびそれが関わる時間性については次のようにまとめられている。

表1 特定の形式と意味の有縁性に関わる時間概念(秋田2005より抜粋)

	例	時間性	Telicity
a. 重複形(持続性・反復性)	ころころ、てくてく	durational	atelic
b. /-R (Q/N) / (持続性)	ばーっ、どかーん	durational	(atelic)
c. /-Q/ (瞬間性、一回性)	ころっ、どさっ	momentary	telic
d. /-N/ (完了)	ころん、からん		telic
e. /-ri/ (完了)	ころり、つるり		telic

### 2.3 先行研究のまとめ

以上、オノマトペの副詞的用法に関する先行研究を概観した。オノマトペの副詞的用法は様々な使用環境において様々な影響を受けていることが分かる。

まず、オノマトベの音韻・形態的特徴によって生じる音象徴性が、副詞的に用いられているオノマトベと修飾する動詞の文末形式への制約を生じさせると考えられる。それに加え、助詞の有無もオノマトベが修飾する動詞の選択に影響を与えていることが分かった。そして、副詞として用いられるオノマトベは、高頻度のものになればなるほど、修飾する動詞の範囲が広く、低頻度になればなるほど、修飾する動詞との固定的な結びつきが強くなっていく。

しかし、副詞的用法についての先行研究においては、ほぼ分類を行っているのみで、その使用頻度や使用状況についてあまり詳しく触れていない。そして、使用頻度における考察においては、基盤としている言語データの母体が大きく、多様なジャンルになればその結果はどうなるのか考察する必要があると思われる。さらに、時間的概念は、音象徴と密接に関連しているのかも大量のデータを用いて分析することで見えてくるのではないかと考えている。

### 3 研究方法

本稿では、国立国語研究所で制作された『現代日本語書き言葉均衡コーパス 2009 モニター公開版 (以下「BCCWJ」と称する)』を用いて用例を収集した。そして、7冊の擬音語・擬態語辞典および三上 (2007) を参照し、604 語のオノマトベを検索語彙として選定した。約7万例あるが、そのうち、検索語 (オノマトベ) の後方15字までを切り取り、修飾した動詞が文末で用いられたもののみについて考察することにした。このようにして、604 語のオノマトベから収集した用例は全部で69,793例である。

先述のとおり、本稿では田守・ローレンス (1999) を参照するが、用語について少し変更を行っている。本稿では副詞として用いられたオノマトベは、副詞的用法としてとらえ、「様態副詞的用法」、「結果副詞的用法」、「程度副詞的用法」、「頻度副詞的用法」と呼ぶことにする。

## 4 考察

### 4.1 オノマトベと助詞

収集したオノマトベの用例のうち、副詞的用法として動詞を修飾しているものは全部で40,988例である。以下、表2に詳細を示す。

表2 収集した用例の詳細

詳細	用例数
「と」を伴う用例 (ト型)	24,846
「に」を伴う用例 (ニ型)	636
動詞を直接修飾する用例 (ゼロ型)	15,506
全体 合計	40,988

表2で示したように、オノマトベが副詞的用法として用いられる際には助詞「と」を伴って用いられるものが圧倒的に多いことが分かる。助詞「に」は主に結果性を含む結果副詞的用法として用いられることが多い。しかし、先行研究でも述べられているように、オノマトベは主に様態副詞的用法として用いられるものが最も多い。本稿における分類においても、様態副詞的用法が全体の約95%を占めている。

西尾 (1983)・宮内他 (2011) などで述べられているように、助詞「と」を伴っているオノマトベが広範囲であり、オノマトベの多様性の広がりの中には「と」を伴ったものである、という論述は表2の数量的データによって証明される。助詞「に」を伴うオノマトベは部分的であることも見て取れる。

助詞「と」は、そのままの形では動詞を修飾することができない、音韻的制約のあるオノマトベの後ろに付加された形で動詞を修飾する。

- (1) 伯父は、ぼくの背中をぐっとおした。 (『あご伯父の川』)
- (2) 「生意気な子どもたちに、ガツンと言ってくれたね」(『学校を変えよう!』)
- (3) しだいに早くなってジャーと終わります。 (『セミの生活史』)

このように、促音・撥音・長音で終わるオノマトペは、助詞「と」は必須であるのに対して、助詞「に」は、那須(2007)で述べられているような音律調整機能は持っておらず、「に」を付加した形で用いることはできない。したがって、以下の(4)のような例文は非文になる。

(4) a. \*ぐっにおした / b. \*ガツンに言ってくれたね / c. \*ジューに終わります

オノマトペ助詞である「と」と「に」は、西尾(1983)で述べられているように、それぞれの役割を果たしており、助詞「と」および「に」両方の助詞を取りうるものは、助詞によって構文の特徴も違ってくる。

(5) バラバラに / バラバラと 崩れている

(6) グルグルに / グルグルと 巻く

このような助詞「に」の場合は、静的なものであり、後ろには仁田(1983)で言う起動動詞が用いられる。本稿の調査では、主に「乾く、枯れる、固まる、崩れる、痩せる、怒る、破く、詰める、縛る、疲れる、壊す、縮れる、磨く、汚れる、出来上がる、裂く」などのような動詞が確認できた。

上記の(5)(6)は助詞「に」を伴った状態で起動動詞を伴うことで結果性を帯びることになり、結果副詞的用法として機能することになる。

(7) a. バラバラ崩れている / b. グルグル巻く

(5)(6)のオノマトペに助詞を伴わないで使用する場合は、「と」が優先的に考慮されるため、(7)のような用例はどちらも動的に感じられる。すなわち、「バラバラ(と)崩れている / グルグル(と)巻く」として解釈されるため、様態副詞的用法として機能することになる。

このように、オノマトペに後続する助詞は、「と」を必須とするもの、および随意的に伴うものが占める割合が高いため、「と」を伴うのが一般的であり、「に」を伴うものは有標なものになる(西尾1983)。

ほとんどのオノマトペは、助詞「と」を必須あるいは随意的に伴うことができるが、助詞「に」を伴うオノマトペも全種類(ABAB型、ARAR型、ANAN型、AQBR型、ABAB型、ABNABN型、ALAL型)確認できた。

(8) ロックタイトでガチガチに固められているので、(『整備日誌アラカルト』)

(9) がりがりにやせて死んだの。(『中国行きのスロウ・ポート』)

(10) 鈴木杏って顔パンパンにはれてませんか?(Yahoo!知恵袋)

(11) ジェシカそっくりに作られている(後略)。(『ハイドゥナン』)

(12) めちゃくちゃにつぶれ、だれだか(後略)。(『クレイジー・ジャック』)

(13) こてんこてんに怒られて、(後略)。(『愛・仕事・子育て』すべてが生活』)

(14) ぎゅうぎゅうに押しつめられて(後略)。(『宇宙人はほんとにいるか?』)

このようにオノマトペは、助詞「に」を伴い、結果副詞的に機能しているが、次のように様態副詞的に機能する用例も確認できる。

(15) 資金を文字どおりじゃぶじゃぶに供給しても(後略)。(国会会議録)

(16) 岸川は自身たっぷりに笑いかける。(『エンブリオ』)

(17) 突然、かんかんに怒り出したのだ。(『永遠の旅のはじまり』)

(18) 「小さいときからベタベタに可愛がって育てたので」(『オトコの介護力』)

これらのオノマトペは「着く、行く、供給する、見える、言う、吹く、光る、撫でつける、痛む、読む、作る、可愛がる、いじめる、走る、笑う、回答する、考える」などの動詞と共に用いられている。

## 4.2 オノマトペの使用頻度と動詞修飾

陳(2007)は、200万字雑誌におけるオノマトペの使用頻度を考察し、出現頻度が13~135回のを高度使用層、2~12回のを中度使用層、1回しか用いられていないものを低度使用層として分類している。高度使用層の39語のオノマトペは、頻繁に使われているため、基本語彙であると認識するほどのものであり、共起できる動詞が多いため、修飾する動詞が分からなければ、

聞き手にとって、どんな事態を表すのかは想像しにくいとしている。中度使用層の218語のオノマトベは、すぐにどんな物事を表現したいのかをイメージでき、我々が意識しているオノマトベに近いとしている。低度使用層の237語のオノマトベは、擬音語が多く、同時に複数の擬音語と擬態語に関連している意味を持っている語彙であるとしている。

ここではこの陳(2007)の主張、即ちすべての高度使用層のオノマトベは、修飾する動詞が多く、低度使用層になればなるほど修飾する動詞が少なくなってくることにについて検討する。

本研究で収集したオノマトベの頻度表は紙幅の関係上割愛する。頻度が高いほうから見ていくと、1000例を超えるオノマトベは「はっきり(2,911例)、ちゃんと(2,510例)、ゆっくり(2,497例)、しっかり(2,387例)、すっきり(1,761例)、じっと(1,503例)、ふと(1,391例)、きちんと(1,186例)」の順になっている。なお、修飾する動詞(ランダム形式で100位までを対象に)の分析は、国立国語研究所で作された『分類語彙表』を参照する。

「はっきり」が修飾する動詞は、「精神および行為(約65%)」「抽象的關係(約30%)」「自然現象(約5%)」の順となっている。「精神および行為」を表す動詞を修飾するものの中では、特に「言語」を表す「言う、話す、説明する」などの動詞が圧倒的に多く、約80%を占める。次に多いのが「心」を表す「分かる、認識する、理解する」などの動詞で、約18%を占める。残りの約2%は「生活」を表す「開ける」などの動詞である。

「ちゃんと」が修飾する動詞は、「精神および行為(約86%)」「抽象的關係(約8%)」「自然現象(約6%)」の順となっている。「心」を表す「理解する」などのような動詞が最も多く、約41%を占める。次いで「言語」を表す「言う、話す」のような動詞を修飾するものが約24%を占めている。「行為」を表す動詞は約17%あるが、すべて「できる」で用いられている。「生活」を表す「食べる、食事する、寝る」のような動詞が約10%を占めている。「交わり・経済・事業」がそれぞれ約2%未満になっている。

「ゆっくり」が修飾する動詞は、「精神および行為(約70%)」「抽象的關係(約27%)」「自然現象(約3%)」の順となっている。「生活」を表す動詞を修飾するものが多く、「食べる、寝る、頷く、立ち上がる」など身体動作に関わるもの

が約40%以上を占める。「話す、言う」などの「言語」を表す動詞が約25%を占めている。「心」および「行為」を表す動詞がそれぞれ約15%を占めている。「交わり」を表す動詞「会う」などは最も少なく、約5%を占めている。

「しっかり」が修飾する動詞は、「精神および行為(約88%)」「抽象的關係(約10%)」「自然現象(約2%)」の順となっている。「考える、認識する、理解する」などのように「心」を表す動詞が最も多く、約40%を占めている。次に「食べる、寝る」のような「生活」を表す動詞が多く、約34%を占めている。「待遇」を表す動詞が約10%、「言語」を表す動詞が約8%、「行為」を表す動詞が約6%、「経済」を表す動詞が約1%を占めている。

「すっきり」が修飾する動詞は、「精神および行為(約45%)」「抽象的關係(約42%)」「自然現象(約13%)」の順となっている。上記に挙げているオノマトベと違い、「精神および行為」と「抽象的關係」を表す動詞の割合がほぼ同じであることが分かる。「精神および行為」を表す動詞のうち、主に「忘れる、落ち込む、開き直る、感心する」などの「心」を表す動詞を修飾するものが最も多く、約79%を占めている。「言語」および「生活」を表す動詞がそれぞれ7%を占め、「行為」および「経済」を表す動詞がそれぞれ約3%を占めている。「抽象的關係」を表す動詞は、主に「変わる、終わる」などのような「作用」を表す動詞が約63%を占める。

「じっと」が修飾する動詞は、「精神および行為(約93%)」「抽象的關係(約4%)」「自然現象(約1%)」の順となっている。「精神および行為」を表す動詞のうち、主に「見る、見つめる、見守る、見上げる」などの動詞を修飾しているものが最も多く、約79%を占めている。次に多いのが「生活」を表す、「座っている、立ち留まっている」のような身体動詞を修飾しているもので約20%を占め、「行為」を表す動詞が最も少なく、約1%を占めている。

「ふと」が修飾する動詞は、「精神および行為(約89%)」「抽象的關係(約9%)」「自然現象(約2%)」の順となっている。「心」を表す動詞を修飾するものが多く、「思う、見る」などの動詞が約85%以上を占めている。「ふと思出す」のように「ふと」は思考動詞との組み合わせが最も多いのではないかという推測に反し、約76%が「見る、見かける、見上げる」のような動詞であり、思考動詞は約12%しかなかった。「言語」を表す動詞はほぼ「つぶやく」という

動詞であることが分かった。「ふと」が表す意味の特徴ゆえに、修飾できる言語関連の動詞も限られていることが明らかになった。

「きちんと」が修飾する動詞は、「精神および行為（約82%）」「抽象的關係（約17%）」「自然現象（約1%）」の順となっている。「言う、伝える、表現する」のような「言語」を表す動詞が最も多く、約39%を占めている。次に多いのが「考える、理解する」などのような「心」を表す動詞で、約25%を占めている。その他に、「行為」を表す動詞が約11%、「生活」を表す動詞が約8%、「経済」および「事業」を表す動詞が約6%、「交わり」および「待遇」を表す動詞が約3%を占めている。

このように、用例を考察すると、おおむね、陳（2007）の論述を支持する形に見えるが、しかし、使用頻度が上位にあるオノマトベであっても、「じっと」は主に「座る、見る」のような動詞を修飾しており、「ふと」は「見る、見かける、見上げる」のような動詞を主に修飾している。陳（2007）で述べているように、使用頻度が高いのは、たくさんの動詞を修飾しているからだけではなく、日常生活で最も使用頻度が高い動詞が存在するという点も考慮しなければならぬ。要するに、使用頻度が上位のオノマトベであっても、一方依存と相互依存の両方のオノマトベがあると言える。

使用頻度が低いオノマトベは以下のようにになっている。1例しか見つからなかったオノマトベは全部で33語、2例のみのオノマトベが31語、3例のオノマトベが27語、4例のオノマトベが24語、5例のオノマトベが20語である（本稿では紙幅の関係上、低頻度5例までのものを提示する）。1例のみのオノマトベは、「あっぶあっぶ→溺れ続けている、いちゃいちゃ→抱き合う、うずうず→顔をほころばせた、うろちょろ→掛られる、がっぼがっぼ→儲けている、ぎこぎこ→木を切り始める、ぎすぎす→痩せてしまう、ぎとぎと→光る、げんなり→痩せる、こせこせ→作る、こてんこてん→怒られる、ちやほや→育てる、びしょびしょ→濡れる、びちゃびちゃ→歩いて行く、ひやひや→酒飲んでいる、ひゆるひゆる→ゆれている、ふがふが→うなる、ぶかぶか→鳴らす、ぶわぶわ→聞こえてくる、へどもど→言う、ぼさっ→言う、ぼちゃぼちゃ→行く、むちむち→肉をつけいる」がある。

使用頻度が低いこれらのオノマトベが修飾する動詞は、確かに相補依存のも

のが多く、その他の動詞を修飾することは少ないようである。「いちゃいちゃ」や「げんなり」などは、「する」とともに動詞化した形で使われるため、副詞的用法が比較的少ないと考えられる。つまり、擬情語は「する」を伴った形の用法が多いため、副詞的用法の使用頻度が非常に少なくなっていると考えられる。さらに、高度使用層のオノマトベは様々な動詞を修飾できるため頻度が高くなっているのであり、高度使用層だから様々な動詞を修飾できるということではないと言えるかもしれない。

最後に、副詞的用法の使用頻度が上位のオノマトベを以下に示す。使用頻度が上位にあっても、副詞的用法として用いられやすいオノマトベとそうではないオノマトベが存在することが見て取れる。

表3 頻度が高いオノマトベの全体数および副詞的用法数の比較

オノマトベ	全体	副詞的用法	割合	オノマトベ	全体	副詞的用法	割合
1はっきり	5,066	2,911	57%	9そっと	1,003	930	93%
2ちゃんと	2,923	2,510	86%	10たっぶり	895	661	74%
3ゆっくり	2,795	2,497	89%	11そろそろ	1,076	609	57%
4しっかり	3,476	2,387	69%	12どンドン	2,145	600	28%
5すっかり	1,795	1,761	98%	13さっと	532	528	99%
6じっと	1,838	1,503	82%	14ぼんやり	832	524	63%
7ふと	1,470	1,391	95%	15じっくり	481	465	97%
8きちんと	1,496	1,186	79%	16あっさり	548	461	84%

（副詞的用法が多い順に並び替えて示している）

「ふと、そっと、さっと」のようなオノマトベは約90%以上が副詞的用法として用いられている。これらのオノマトベは、促音語尾を持ち、名詞や動詞用法になりにくいいため、副詞的用法のほうが圧倒的に多いと考えられる。しかし、その他のオノマトベは、約50%～80%前後を占めており、名詞や動詞、形容詞的用法として用いられていることが分かる。頻度の高さとそのオノマトベの品詞は直接関係ないと言える。本研究と、雑誌を対象とした調査を行っている陳（2007）との違いは、均衡コーパスにおいては、低頻度のオノマトベで

あっても、擬音語の使用が少ないということである。

### 4.3 オノマトペと時間性とのかわり

先行研究を振り返ると、オノマトペは、a.重複形、b./R(Q/N)/c./-Q/、d./-N/、e./-ri/の5つのタイプがある。これらのオノマトペの音象徴性とそれが修飾する動詞の間にはどのような関係があるのか、文末形式について時間的観念を用いて考察を行った。その結果、次の図1のようになっている。

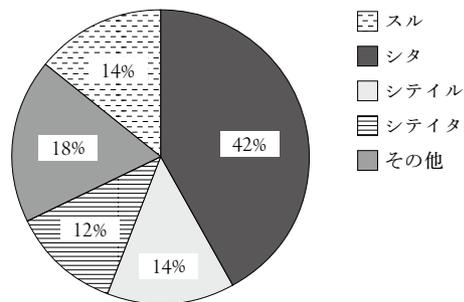


図1 オノマトペの音韻的特徴と文末形式

図1で示したように、オノマトペが修飾する動詞の文末形式はシタ形が最も多く約42%を占めている。スル/シテイル形はそれぞれ約14%を占め、シテイタ形は約12%で最も少ない。主に上記の「スル/シテイル/シテイタ/シタ」の4形式に焦点を当てて考察を行う。以下、5つのタイプを順に見ていく。

重複形のオノマトペが修飾している動詞の文末形式の使用頻度は、シタ形(約41%)→シテイル形(約22%)→スル形(約19%)→シテイタ形(約18%)の順になっている(紙幅の関係上、用例はすべて1例ずつ挙げることにする。以下同様である)。

(19) 明子は、いそいそとお茶をいれた。 (『猫を抱いた死体』)

全体的にシタ形が多いのは確認できたが、シテイル/シテイタ/スル形の占める割合はあまり差がなかった。動詞の意味とオノマトペの間には相関関係

があるものの、文末形式の制約を受けているものは少ないようである。重複形のオノマトペは動作の反復および持続を表すため、動きのある様態副詞のオノマトペが多く、それが修飾する動詞も動作と関わっているものが多い。しかし、この中には、「きらきら輝いている」のように、あるものの状態をシテイル形で修飾するものが比較的多い。

/R(Q/N)/のオノマトペが修飾している動詞の文末形式の使用頻度は、シタ形(約56%)→スル形(約21%)→シテイル形(約16%)→シテイタ形(約7%)の順になっている。

(20) 家の中を覗きこむように自転車ですーっと通った。 (『少年H』)

シテイタ形を用いる割合が低く、主にシタ形を使用している。撥音と促音は一回性をイメージしやすいが、長音が入ることによって、オノマトペ自体に時間的余裕をもたらしている。そのため、「がーんとぶつかる」は、「がんとぶつかる」より、あるものがぶつかるまでにある程度の時間的余裕があったように感じられる。「じーんと冷える」においても急速に冷えているわけではなく、徐々に冷えていく様子が想像できる。しかし、時間的長さを有しているものの、「じーっと見ていた」は言えるのに対して、「そーっと座っていた」の「そーっと」は、座る瞬間の動作を描写しているため、不自然である。同じく、「雨がざーっと降っていた」は、「ざあざあと降っていた」と違って突発的、一時的なイメージが強いため、進行形とは共起しにくいのだと思われる。

/-Q/のオノマトペが修飾している動詞の文末形式の使用頻度は、シタ形(約45%)→スル形(約23%)→シテイタ形(約20%)→シテイル形(約12%)の順になっている。

(21) わたしの肩に、圭介の手が、そっと触れている。(『心に嘘をつかないで』)

ほかのタイプと比べて特徴的なのが、シテイタ形のほうがシテイル形より多く用いられていることである。促音語尾は、瞬間性や一回性を表すので、促音語尾のオノマトペがもたらす音象徴的效果が1回行われた動作の現在進行を表

すことと矛盾しているためであると考えられる。つまり、瞬間性を表すものが「がたんと揺れている」、「はっと顔をあげている」のようにすると違和感がある。さらに、「びしっと叱る」においても、一回性のオノマトベであるため、「びしっと叱っている」は非文に近い。このように考えると、「そっと触れている」「ぶすっと沈黙している」は一回性、瞬間性を表すのに、シテイル形が用いられている。このような用法は、「触れている瞬間」「沈黙している瞬間」をある場面の一つとしてとらえているためなのかもしれない。

/N/形のオノマトベが修飾している動詞の文末形式の使用頻度は、シタ形(約52%)→スル形(約35%)→シテイル形(約7%)→シテイタ形(約6%)の順になっている。

(22) 力が抜けて、女はその場がぐんと崩れ落ちた。(『凶剣凍夜』)

動詞選択において、「す」と降りる／落ちる」が言えるのに対して、完了した動作の持続を表す「す」と落ちている／落ちていた」は言えない。さらに、「ぐんとアップする」は言えても、「ぐんとアップしている」のような使い方はできない。このことから考えるとテイル形との共起が難しいように感じるが、「しんと静まりかえっていた」「ちょこんと座っている」のような場合は動作ではなく、ある状態を表すことから自然な文になる。収集した用例には、「どんとたたいていた」とあるが、日本語ネイティブに確認したところ、二回繰り返されている「どんとたたいていた」は自然なのに対して「どんとたたいていた」は瞬間的なイメージが強く、テイタと共起するのは不自然になる。

/ri/形のオノマトベが修飾している動詞の文末形式の使用頻度は、シタ形(約36%)→スル形(約32%)→シテイル形(約18%)→シテイタ形(約14%)の順になっている。

(23) 恩田沙英は返答に詰まるどころか、いともあっさりと答えた。(『ベストセラー殺人事件』)

音象徴的には完了の意味を表しているが、必ずしも完了の意味が生きて修飾

する動詞に影響を与えているものはそれほど多くないようである。「ごろりと変わる／ごろんと変わる／ごろごろ変わる」を例に考えると、ここでは「ABリ」のオノマトベが、その他の「AQBリ／ANBリ」のタイプと比べ、音象徴的意味をより再現しているように感じられる。

## 5 おわりに

本稿では、オノマトベが副詞的用法として用いられる際にどのような副詞として用いられているのか、さらに修飾する動詞との間にはどのような関係があるのかについて見てきた。まず、オノマトベ助詞「と」が一般的で「に」が有標であるということを確認できた。次に、使用頻度が上位にあっても、特定のいくつかの動詞しか修飾しないオノマトベもあり、使用頻度が必ずしも修飾する動詞の多様性・およびその品詞性とオノマトベの意味的分類(擬音語・擬態語)を決めることはできないということが分かった。最後に動詞の文末形式に焦点を当て、持続性・反復性の意味を持つオノマトベは文末形式にあまり制約を持たない一方、一回性・瞬間性のオノマトベは進行や状態を表すシテイル形と共起して使用するものが少ないように、オノマトベの音象徴的意味とそれが修飾する動詞との間にはある程度の相関関係があることが分かった。

本稿では、オノマトベの意味的分類による動詞の選択については詳しく見ることはできなかった。今後はオノマトベの下位分類を取り入れてさらに動詞との関係を見ていきたいと思います。(東京外国語大学大学院生)

### 参考文献

- 秋田喜美(2005)「日本語の擬情語心理動詞における時間性一日英通常心理動詞との比較」『日本語学会第131回大会予稿集』口頭発表  
泉邦寿(1976)「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現日本語講座第四巻』, pp.105-151. 大修館書店  
寛寿雄(2001)「変身するオノマトベ」『言語』30(9), pp.28-36. 大修館書店

- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表一増補改訂版』大日本図書
- 田守育啓・スコウラップ, ローレンス (1999) 『オノマトペー形態と意味』くろしお出版
- 陳志文 (2007) 「日本語教育におけるオノマトペの提出順序についての一提案—「2005年現代雑誌200万字言語調査語彙表」の考察から」『2007年度財団法人交流協会日台交流センター 日台研究支援事業報告書』pp.1-16. 財団法人交流会
- 那須昭夫 (2007) 「オノマトペ語尾の分布と相互の関係」『筑波日本語研究』12, pp.1-25. 筑波大学人文社会科学部研究科日本語学研究室
- 西尾寅弥 (1983) 「音象徴語における意味用法の転化の一類型」『語学と文学』20, pp.82-96. 群馬大学語文学会
- 星野和子 (1991) 「擬態語の用法—構文論の観点から」『講座日本語教育』26, pp.127-144. 早稲田大学日本語研究教育センター
- 仁田義雄 (1983) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2, pp.18-29. 明治書院
- 三上京子 (2007) 『日本語オノマトペとその教育』早稲田大学博士論文
- 宮内佐夜香他 (2011) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に基づくオノマトペの分析—品詞性の検討を中心に」『言語処理学会第17回年次大会発表論文集』pp.651-654. 言語処理学会
- Hamano, S. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurocio Publishers.
- Kita, S. (1997) Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics With a mimetic: Areply to Tsujimura. *Linguistics*, 39(2), pp.419-436.

---

## 使用したコーパス

国立国語研究所 (2009) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス 2009 モニター公開版』

---

## 辞書類

- 浅野鶴子 (編) (1978) 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 阿刀田稔子・星野和子 (編) (1995) 『擬音語擬態語使い方辞典』創拓社
- 天沼寧 (編) (1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 小野正弘 (2007) 『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 曹金波 (2008) 『標準日本語擬声語・擬態語』大連理工大学出版社
- 飛田良文・浅田秀子 (編) (2002) 『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂出版
- 山口仲美 (編) (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社